

## 〈論文〉

## “How about” 構文の拡張的用法について

伊藤 丈志

## 要 約

名詞、動名詞しか後続できないとされていた“How about”には、口語会話を中心に節(文)が後続する拡張的な用法が見られる。本研究では、“How about”の節(文)を後続させる拡張的な用法に着目し、この構文の特徴を考察した。具体的には、主語の位置には“we”、“you”、“I”が立つことが多いことなどの特徴を指摘し、こうした拡張的用法を可能にしたのは、“How about”の提案、勧誘といった発話機能であり、さらに仮定法現在と直接法の合流といった英文法の変化などが相互作用した結果であることを主張した。

キーワード：“How about” 基本的用法 拡張的用法 類推 用法基盤モデル

## 1. はじめに

Quirk et al.(1985:839-840)や江川(1991:461)など伝統的な英文法書では、“How about”に後続できるのは名詞(句)または動名詞であると記述されているが、住吉(2016:81)で指摘されているように、“How about”は副詞(=1)、wh節(=2)、if節(=3)、節(=4)が後続することがある。

- (1) How about a little later? (住吉 2016: 81)
- (2) How about when I'm 40 and you're 80? (住吉 2016: 81)
- (3) So how about if I give you a few days and then I call you? (住吉 2016: 81)
- (4) How about I tell a story of my own? (住吉 2016: 81)

本研究では、名詞、動名詞を従える“How about”を基本的用法として、それ以外の要素、特に節(文)を従える用法を拡張的用法とし、こうした“How about”の基本的用法とは異なる拡張的用法にはどのような特徴が存在するのか、また拡張的な用法はどのような要因によって引き起こされていると考えられるのかを考察し、“How about”が節(文)を導く言語表現へと文法化されていく過程を追ってみたい。まず、第2節では、“How about”の拡張的な用法に関する先行研究を整理し、第3節では、拡張的な用法の特徴を整理する。第4節において、“How about”の拡張的な用法が生じる要因を考察し、第5節で今後の課題と展開について考察したい。



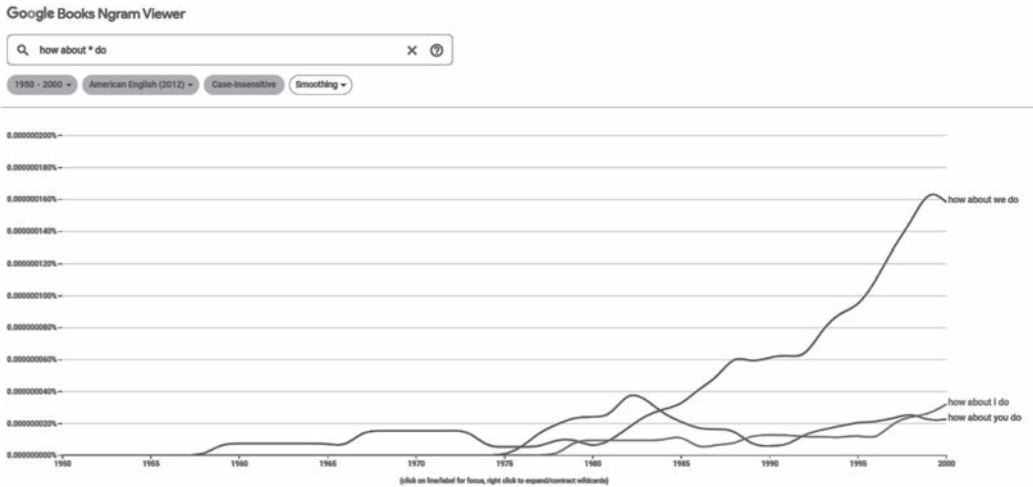


図1: Google Books Ngram Viewer における“How about \* do”で検索した結果(2022年2月16日検索)  
[https://books.google.com/ngrams/graph?content=how+about+\\*+do&year\\_start=1950&year\\_end=2000&corpus=17&smoothing=3&case\\_insensitive=true](https://books.google.com/ngrams/graph?content=how+about+*+do&year_start=1950&year_end=2000&corpus=17&smoothing=3&case_insensitive=true)

このように、“How about”構文は、節(文)を後続させることができるように用法が拡張している一方で、主語に立てるのが“we”, “I”, “you”などの語彙に集中するなど、拡張には一定の制約があることがわかる。次節では、この構文の拡張的な用法にはどのような特徴があるのかを探っていききたい。

### 3. “How about” 構文の拡張的な用法のタイプ

後続要素は名詞、動名詞に限定されるとされていた“How about”構文は、節(文)も従えることが明らかになったが、どのような節(文)でも後続可能なわけではなく、2節で見たように、主語には“we”, “you”, “I”が集中して現れる。また、主語に“we”という代名詞は用いられなくても、発話当事者同士(つまり“you”と“I”)が関与している事柄であることが表現されるような例もある。(15)では、“you and I”と明示的に発話当事者2人を表現しているが、(16)、(17)では、“How about”に“and”で結ばれた重文が後続しており、形式的に主語をどれであるのか一つに限定するのが不明である。むしろ、“I”と“you”が“How about”に導かれる文の内容に関わっていると考えるほうが重要であると思われる例である。

- (15) How about you and I find a healthy balance together?  
(This is Us, First Season, Episode 2)
- (16) How about I give the kid a pot and a pan to bang on, and you pay me 40 bucks an hour instead, huh? (This is Us, Fourth Season, Episode 4)
- (17) How about you go put on your 007 tuxedo and I'll make you a nice martini.  
(FRIENDS, Seventh Season, Episode 20)

さらに、(18)でも、一見すると主語は“you”に見えるが、複文が後続しており、ここでも“How about”以下の文は発話当事者2人が関わっていることを表している。

(18)

How about, you get to the museum, I'm gonna finish up with these maniacs, get'em back to the hotel, then you just meet us over there.

(*This is Us*, Fourth Season, Episode 16)

このように発話当事者2人が関わっていることを表す文が“How about”に後続する文に典型的なパターンであることがわかると、以下のように“How about”で文をはじめながら、途中で“let's”が登場するのも全く不自然なものではないと感じられる。

(19) How about you less important people, let's open your presents!

(*FRIENDS*, Eighth Season, Episode 20)

(20) How about, whenever we're feeling like we really have to call them - and we just can't take it anymore- instead of calling our exes, let's call each other.

(*I Want You Back*)

ただし、中には、以下の(21)のように、主語に“they”が使われる場合もある。

(21)

Will : How many copies did you guys make?

Sue : 17.

Will : Okay! And how much does a photocopy cost?

Figgins : Four-and-a-half cents.

Will : How about they just pay for the copies?

Figgins : I like this compromise. Children, pay Ms. Sylvester, and we'll let you off with a warning. (*Glee* First Season, Episode 2)

この場面で、WillはGleeクラブの顧問であり、使用が許されていないコピー機を自分のクラブの生徒が使用してしまい、敵対するチアリーディング顧問のSueに見つかり、校長のFigginsに注意を受けている場面である。生徒たちもこの場に同席している。はじめにWillが生徒達に何枚コピーしたのかを問いただしており、そのあとに“How about they just pay for the copies?”と校長に提案している。ここでWillは、Gleeクラブ側に立って“we”と表現することも可能ではあるが、その場にいる生徒達を“they”と表現することで、あくまでも教師間の(いわば大人の)会話にすることによってその場を収めている。

一方、動詞の時制については、主語が“we”, “you”, “I”に集中しているため、判別は難しいが、(22)のように、現在形あるいは原形が現れるのがほとんどである。その一方で、数的には多くはないものの、(23)のように時制のある平叙文が後続することもあり、Huddleston & Pullum (2002:909)の指摘通りである。

(22) Okay, so how about we vote?

(*This is Us*, Second Season, Episode 11)

(23) How about I'll, uh, catch up with you in the Ice Age.

(*FRIENDS*, First Season Episode 2)

さらに、以下のように過去時制が“How about”に後続しているような例も存在する。

(24)

Ross: Y'know, I-I—you've done a lot of stupid stuff too! Okay?

Rachel: Oh, name one stupid thing that is as stupid as this one!

Ross: Okay, how about you flew to London to stop my wedding! Ah, how about you told me you loved me after I was already married!

(*FRIENDS*, Sixth Season, Episode 5)

ここでの例は、当然のことながら、過去の行為を勧誘しているのではなく、過去の事実を引き合いに出して提案している例である。このように事実関係を引き合いに出すのに“How about”が利用されることは、下記の例のように、“How about the fact that ~”というフレーズにおいても確認できる。

(25)

Monica: What have I not told you?

Phoebe: Oh, I don't know. Umm, how about the fact that the underwear out there on the telephone pole is yours from when you were having sex with Fun Bobby out on the terrace.

Rachel: What!

(*FRIENDS*, Second Season, Episode 4)

(26)

Ross: Are you sure she's in the cat, or have you been taking your grandma's glycoma medicine again?

Phoebe: No Dr. Skeptismo! I'm sure. First of all, okay, there's the feeling. (Chandler shrugs) Okay, and for another, how about the fact that she went into my guitar case which is lined with orange felt.

(*FRIENDS*, Fourth Season, Episode 2)

事実関係を引き合いに出す用法は、過去の事実にとどまらず、未来、仮定の事柄についても、下記の例のように拡張されて、「こういう場合はどうだ」と仮定の事例を提示して、相手に問いかける用法につながる。

(27)

Monica: I got it! How about, if we win, they have to get rid of the rooster?

Rachel: Oooohh that's interesting.

(*FRIENDS*, Tenth Season, Episode 10)

さらに、こうした事例を提示するという用法は、“How about this”といったん文を切って、事例を提示する以下のような用法にもつながっていく。この“How about this”に後続する文は、形式的にいったん“How about”から分離するからか、時制を持った平叙文が現れやすくなっている。

(28) Okay, well, how about this: you tell me your evil feeling and I'll tell you mine.

(*This is Us*, Fourth Season, Episode 9)

(29)

Joey: Alright, alright, okay, uhm... How'bout this, how about this? Tomorrow... tomorrow we'll both go and we'll tell him together.

(*FRIENDS*, Tenth Season, Episode 1)

(30)

Phoebe: We're just... we're trying to figure out an excuse. Hey! Ooh! How about this: We can say that Monica told us 5 o'clock, not 4 o'clock. That way we're right on time!

(*FRIENDS*, Tenth Season, Episode 8)

このように、事実関係を引き合いに出して提案するという用法が、“How about the fact ~”という構文、さらに“How about this.”という形式とつながっている考え方は、Langacker (1988)をはじめとする認知言語学における用法基盤モデルの考え方とも合致するものである。

#### 4. “How about”の拡張的な用法が生じる要因

名詞、動名詞を従えるのが“How about”の基本的な用法であるが、節(文)を従えるのが拡張的な用法である。ただし、いかなる節(文)をも従えることができるわけではなく、主語が“we”, “I”, “you”に集中している。このことは、Huddleston & Pullum (2002:909)などで指摘されている通り、“How about”が勧誘、提案の機能があることから生じるのであろう。つまり、勧誘、提案といった発話行為が成立するためには、話し手と聞き手の存在が適切性条件に含まれていると考えられるため、これらが主語になるのが最も自然なのであろう。3節の(19), (20)の例のように“let's”が後続することがある点も、これと関係していると思われる。

使用される動詞が現在形または原形が多いということについても、勧誘、提案という機能と結びついていると考えられる。勧誘、提案はこれから実現してはどうかと話し手が考える情報を相手に提示するものであるため、その情報はいわば現実には存在しないものであることから「非現実相」(irrealis)に関わる情報と言える。そのため動詞は原形であるといえる。“How about”は時に、下記のように、命令文も後続させることもあるが、原形動詞によって表される命令文の情報は非現実相に属すると考えることも可能であるため、不自然な拡張ではないと言える。

(31)

Rebecca: And, Kate, of course a baby would be cause for celebration. But I …

Kate: Why is there a “but”? How about stop at “celebration” and just stop there?

Rebecca: I just think it’s irresponsible.

(*This is Us*, Fourth Season, Episode 12)

この原形で表される「非現実相」(irrealis)に関わる情報は、仮定法現在といわれることがあるが、これが以下のように、“How about”が“if”節(文)を従える場合につながるのだと思われる。

(32) How about, how about if we try calling the sheep? - Maybe they’ll come to us, huh?

(*This is Us*, Third Season, Episode 2)

一方で、出縄(2017)が述べているように、(33), (34)のように同じく提案、勧誘の意味を表すことが可能な“what if”構文との類似性からの類推が働いて生じたのが“How about if ~”構文である可能性もある。

(33) What if you join us for lunch?

(34) What if you don’t join us for lunch just this once?

この“what”構文との類似性による類推が働いて“How”の使用が影響を受けていると思われる事例は以下の例でも確認できる。

(35)

Ross: So, um- so how’s this, uh, how’s this gonna work? Y’know, with us? Y’know, when, like, important decisions have to be made?

Carol: Give me a ‘for instance’.

Ross: Well, uh, uh, I don’t know, okay, okay, how about with the, uh, with the baby’s name?

Carol: Marlon-

Ross: Marlon?!

Carol: -if it’s a boy, Minnie if it’s a girl.

Ross: …As in Mouse?

Carol: As in my grandmother.

Ross: Still, you- you say Minnie, you hear Mouse. Um, how about, um.. how about Julia?

(*FRIENDS*, First Season, Episode 2)

ここでは、with 句が“How about”に後続しているが、これは以下のような“what’s with ~?”構文からの類推あるいは混同の結果と解釈することも可能かもしれない。

(36) What’s with the long face?

しかし、仮定法現在では“if”を伴わない形で現代英語では用いることが通常であり (cf. 江川 1991:249)、下記のような提案、勧告などを表す動詞に続く that 節で用いられるのが普通となっている。

(37) I propose that we take a vote on that next week. (江川 1991:250)

(38) It is requested that every candidate write legibly and that no one leave the hall till half an hour after the commencement of the examination. (江川 1991:250)

こうした現代英語 (特にアメリカ英語) の仮定法現在を if なしで使用する傾向が、“How about”に原形動詞を含んだ節 (文) を後続させる要因になったと考えられそうである<sup>2,3</sup>。

さらに、現代英語では、仮定法現在を直説法で表現されることが多くなってきていることが指摘されており (e.g. 江川 1991:249)、Bolinger (1977:189) でも、仮定法現在と直説法を区別する人もいれば、中にはどちらの場合でも直説法だけを用いて済ますような人もいるとの記述がある。こうした現代英語の仮定法を避けて直説法を使う傾向が“How about”にも影響が及び、“How about”に直説法現在の節 (文) が後続する用法が生まれたのではないか。

これまでの議論をまとめて図示化すると以下ようになる。これは“How about”が名詞、動名詞のみを従える基本的用法から、節 (文) を従える拡張用法にどのような過程を経て拡張したのかに関する仮説である。

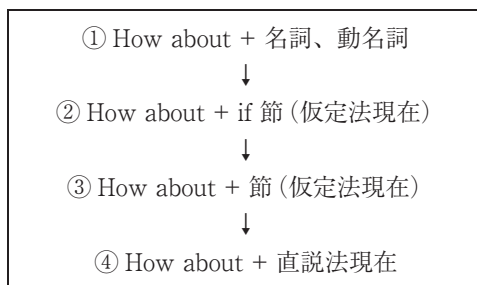


図2：“How about”の拡張過程の仮説

## 5. 今後の課題と展開

節 (文) を従える“How about”構文についての用例を調査した結果、いくつかの特性が明らかになったものの、名詞、動名詞だけを従えていた基本的用法から、節 (文) を従えるようになった拡張過程を推測することができたが、それを裏付ける事例を採集することまではできなかった。今後は、年代ごとに用例を探ることにより、この構文の拡張過程をより実証的に考察することが可能になるとと思われる。



注

1. 本稿の例文は基本的に以下のドラマ、映画から採取しており、ドラマについてはシーズンとエピソードの回を明記している。

ドラマ：FRIENDS

Glee

This Is Us

Big Little Lies

Cobra Kai

映画： I Want You Back

2. ただし、“How about”が全体として勧誘、提案を表すフレーズに拡張したために、“if”の存在が不要になったと考えることも可能であるが、歴史的には仮定法現在（つまり動詞の活用によって）非現実相を表すやり方は古い文法であることから、逆にもともと動詞の活用だけで仮定法現在を表していたのが、“if”を付加させることによって迂言的に仮定法現在の意味を表現するようになったとも考えることが可能であり、さらなる調査が必要である。

3. 仮定法現在を、ifが存在しない節（文）（例えば提案、勧告などを表す動詞に続くthat節）で用いられる傾向はアメリカ英語に強いとされることが多いが、実際に、節（文）を従える“How about”は英米で使用実態に差があるようで、以下のように、Google Book Ngram Viewerで英米差を調べると、顕著な差を確認することができる。下記は、“How about \* go”（\*はワイルドカード）の使用実態をGoogle Books Ngram Viewerで検索した結果である。図3はアメリカ英語での検索結果であり、図4はイギリス英語での検索結果であるが、アメリカ英語では、主語に3種類の代名詞が出ているのに対し、イギリス英語では“we”の事例しか表示されていない。また、用例数においてもアメリカ英語での用例はイギリス英語を圧倒している。



図3：Google Books Ngram Viewerにおける“How about \* go”で検索した結果（2022年2月16日検索）  
[https://books.google.com/ngrams/graph?content=how+about+\\*+go&year\\_start=1950&year\\_end=2000&corpus=17&smoothing=3&case\\_insensitive=true](https://books.google.com/ngrams/graph?content=how+about+*+go&year_start=1950&year_end=2000&corpus=17&smoothing=3&case_insensitive=true)



図4: Google Books Ngram Viewerにおける“How about \* go”で検索した結果(2022年2月16日検索)  
[https://books.google.com/ngrams/graph?content=how+about+%2A+go&year\\_start=1950&year\\_end=2000&case\\_insensitive=on&corpus=18&smoothing=3&direct\\_url=t1%3B%2Chow%20about%20we%20go%3B%2Cc0#t1%3B%2Chow%20about%20we%20go%3B%2Cc0](https://books.google.com/ngrams/graph?content=how+about+%2A+go&year_start=1950&year_end=2000&case_insensitive=on&corpus=18&smoothing=3&direct_url=t1%3B%2Chow%20about%20we%20go%3B%2Cc0#t1%3B%2Chow%20about%20we%20go%3B%2Cc0)

#### 参考文献

- Bolinger, Dwight. (1977) *Meaning and Form*. Longman.
- 出縄貴良 (2017) 「節を従える how about について」『東洋大学大学院紀要』54号. 279 - 290.
- 江川泰一郎 (1991) 『改訂三版 英文法解説』金子書房
- Huddleston, R. D., & G. K. Pullum (2002). *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- 井上永幸、赤野一郎 (2003) 『Wisdom 英和辞典初版』三省堂
- Langacker, Ronald (1988) “A Usage-Based Model,” in Brygida Rudzka-Ostyn (ed.) *Topics in Cognitive Linguistics*. 127-161. Amsterdam: John Benjamins.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, Jan Svartvik. (1985). *A Comprehensive grammar of the English language*. London ; New York :Longman.
- 大西泰斗、ポール・マクベイ (2017) 『総合英語 FACTBOOK これからの英文法』桐原書店.
- 住吉誠 (2016) 『談話のことは2 規範からの解放』研究社